

幼稚園の計画

—R. シュタイナー教育に基づく施設計画について—

本 村 佳 久

A Kindergarten Project Based on R. Steiner's Pedagogy

Yoshihisa MOTOMURA

[I]

本日のシンポジウムは「木の文化と教育を考える」というテーマですが、現在計画中のシュタイナー教育に基づく木造の幼稚園についてお話いたします。基本設計に入って何年か経過し、最終案の設計をお見せできる予定でしたが、計画地の変更などがありまして、計画の途中経過の報告ということになります*1。

これまでのエスキースの図面とスタディ模型などを見て頂きますが、1600 m²ほどの敷地に50 m²ほどの3クラスの教室と職員室・会議室、100 m²の遊戯室という構成の小規模の平屋の木造幼稚園です。今日は、この幼稚園の計画で園長先生や先生方と話し合ってきましたこととシュタイナー教育と建築について少し、またそれと並行して、設計案を考えながら頭に浮かぶこれまでに感銘を受けた名建築など・弟子として影響を受けた白井晟一先生の私の担当いたしました美術館建築などを紹介させていただきながら、現在考えていることなどをお話致します。

この平面図は、最初の打ち合わせ後、まず、機能をまとめたエスキースのうちの1枚です(図1)。ルドルフ・シュタイナーという人は、御存じの方も多いと思いますが、日本ではおもに教育家として知られている、建築を初め多くの分野の仕事をした、旧ユーゴスラヴィア生まれの思想家・実践家です。この計画で求められているのは、いわゆるシュタイナー建築を造って下さいということです。建築を幾何学的なもの・有機的なものというふうに分けるとしますと、この計画では、「有機的」な建築を求められているということです。今回の計画の粘土模型

*1 本稿は茨城県笠間市で行なわれた「実践教育建築デザイン系研究会」のシンポジウム「木の文化と教育を考える」の講演部分の要旨を修正・加筆し、現時点での計画の状況や考え方をふまえて書き改めたものである。

の写真がここにありますが、ドイツなどにあるシュタイナー学校・幼稚園（シュタイナーの設計したゲーテアヌムなどの影響の下に弟子・後継者達が設計したもの）を、今回の条件にあわせて模倣して設計するとほぼこのようなものになるかと思えます。依頼主は基本的にはこのようなものをもとめているということです。

この最初の平面のスケッチは、8角形の教室群と比較的有機的な形の遊戯室とできていますが、地盤の悪さやコストの面を考慮した妥協の案です。シュタイナーの考えによると、これからの人間の望ましい自然な発展・進化にとって（精神的なことも肉体的なことも含め）、建築の形態としては幾何学的なものよりも有機的なものの方が良いということになります。子供の建築的な生活環境にとっても、低年齢ほど形態としては曲線・曲面に近い造形がより望ましいということになる。それで、すくなくとも直角をなるべく避けた校舎が求められるということになります。同時に建築の材料・素材も化学的な合成物でなくできるだけ自然のままの材料・有機物などを使用すべきで、その意味で木造の施設はよりよいということにもなります。幼児は模倣する存在なので、模倣されても良い、自然な良いもののみ回りに置くという考え方で、建築もその例外ではないということです。

初めに、園長先生に伺ったお話では、30年近く幼児教育について模索・実践してきた結果にシュタイナーの教育論に出会い共感感動し、理想に近い新しい幼稚園を教育方法も建築も含めて創り直して行きたいということで、その後話し合いを続けながら案を考え続けています。私自身も10年以上まえに、ちょうど建築家・故白井晟一先生の下で静岡の芹沢美術館の設計をお手伝いしていた頃、建築の設計に多少とも疑問と限界を感じていた時に、シュタイナーの教育論に出会い、それを契機にその後ドイツに留学してその教育論と建築論を学んだので、園長先生との共感点が多かったわけですが、相違するところはドイツのシュタイナー学校の教育方法や建築をそのまま模倣するだけでは、日本の風土・歴史なども考えると無理なところもあるのではないかとということです。設計をする前にまず授業を見学させてくださいとお願いしたのですが、先生方もたしかに情熱をもって、みなでドイツのシュタイナー幼稚園にも見学にゆき、良い授業をされていて感銘も受けたのですが、形だけの模倣の面もあるのではないかと思いました。このことは、この幼稚園にかぎらずシュタイナーの教育の方法を日本に取り入れようとしている人々にとっての、これからの課題ということでもありますが。これは、幼稚園の設計・建築についてもそのまま当てはまると思えます。今、何年か経って互いに設計案の結論がでていないのはこのこととも関係していると思えます。現在あるドイツなどのシュタイナー学校の形態をそのままコピーすれば良いということだけなら、ある意味では簡単で、さきほどの粘土模型のようなものになるかと思えます。いわゆるシュタイナー的（アントロポゾフの）有機的建築……。今回のローコストの条件のなかでは困難なことでもありますが。

ここでの本質的な困難さは、シュタイナーの理想的な教育論やその後の世界各国での実践を継承しつつ、日本の歴史・風土にも根ざしたシュタイナー幼稚園の建築は、また教育はどのようなものかを考えながら実践するというにありま。特にシュタイナーという名を無理に冠さなくとも良いとも思いますが、良い教育に適した良い学校建築とは、良い教育とは何かという間ですが、ここでは、素晴らしい前例があると依頼者も設計者もともに考えているわけですからそれをまず学び消化することから始まるということも、また確かなこととも思っております。

[Ⅱ]

ここで、ごく簡単にいわゆるシュタイナー教育の一部について考えてみますと、試験や点数で子どもを序列化するというのではなく、ひとりひとりの子供の持っている能力・可能性を美や創造の喜びとともに目覚めさせることによって自然に伸ばして行くといったことになるでしょうか。具体的な方法論のひとつとしては、0歳から7歳までは体の感覚を健全に発達させて周囲に良き模倣の対象を置く。7歳から14歳までは世界をイメージ的、美的に感じとらせる。14歳から21歳まで、ここでやっと、概念・知識などをやはり美的・創造的な喜びとともに学ぶといったことがあります。もちろん教師の質・養成といったことが重要なことになってきますが。この方法に異論もあるかもしれませんが、シュタイナーが最初の学校を依頼されて創設してから80年近く経た現在、その教育実践はドイツなどヨーロッパまたアメリカなどでも一般社会において評価が高まりつつあるようです。それではそのような良い教育に感動して、日本にも持ってこようとも考えるのは自然ですが、日本の風土・歴史・言語等の壁もまた存在する。私自身も10年以上前に、そのような学校をみなで日本にも作りたいと願ってドイツに勉強に行ったところもあったわけでしたが……。いろいろ困難な点もまたあると思います。

建築の問題も同様です。シュタイナーの建築論を私なりに考えますと、建築によって教育と同様に人間をよりよい方向に導くということ。建築も教育もその他の分野もすべて同じ次元で考えられている。建築という、もの、手段によって教育の手助けをするだけではなく、教育そのものとなるようなものを創造するという。これができたらシュタイナーの言っている「建築」また「学校建築」ということになるのでしょう。シュタイナーは「将来における人間の魂にとっての悪から善への真の治癒は、本当の芸術（建築）がその精神的影響力を人間の魂と心に送り込むことの中にある」と言っていますが、そのためにはすくなくとも建築に関わるすべての人が魂を込めて造らなければならないということでもあります。今回の幼稚園の計画では、ドイツのシュタイナー建築と同じようなものを求められていますが、その形をそのまま模倣す

ることではないと私は考えています。そこで考えながら話し合っているという現状です。シュタイナーが今、日本に生きていて幼稚園を設計したとしたら、おそらく、今あるドイツのシュタイナー幼稚園と同じものではないと思います。シュタイナーは、第1ゲータアヌムの焼失直後に第2ゲータアヌムをあれほどまでに異なったものとして設計したということもあります。

シュタイナーの言う建築とは、私の師のひとりの白井晟一先生などと同じ様に、人の魂に触れるもの、それによって魂を変えるようなものということですが、幼稚園の計画でいえば、子供の心・体を自然に良く発達させるような建築。一見観念的・抽象的・理想主義的なことですが、この仕事で具体的に求められていることでもあります。日本の風土・歴史なども考慮してどのような答えがありうるかということで、いま考えているところですので、これまでに設計に関わってきた建築や、感動した古典建築・現代建築をあらためてふりかえっているところです。

[Ⅲ]

ここで、そのような建築のいくつかを見て頂きます。

初めは、自己紹介として最近私の設計したものです。東京のRC打ち放しの2世帯住宅(図2・3)。寝室のエッチンググラス(図4)。これから住宅が密集してくるであろう郊外住宅地・都市の中で、空からの自然・光をどう取り込むかがひとつの課題。

東京の超高層ビルの広場の構想設計の模型です(図5)。都市の中心部で、たとえ人工的であっても、自然(緑・水・石等)をどこまで計画できるか。

台湾の台北市の2万人くらいの新都市の計画です。ここでの私の設定した主な課題は丘陵地の自然を出来るだけ残して計画するということです(図6)。集合住宅と商業施設の複合建築の店舗部分(図7)。イギリスの伝統的家具と日本の職人芸的照明器具との調和がひとつのテーマです。

これは、晩年の故白井晟一先生の下でお手伝いした静岡市立芹沢美術館(図8・9・10)です。建築の勉強を始めてから30年くらいのなかで最も思い出の深いもののひとつです。天井・建具等の木部は檜材。石はソウル近郊の花崗岩。石・木・水の建築です。全体について多くの大きな模型を造り設計の検討をしたものです。

個人的な話になりますが、建築を始めて最初に出会って感銘をうけたのが白井先生の建築と文章でした。お会いして初めてお話を伺った時のことばで印象の深かったのは、歴史を勉強なさい、ということでした。また、夜中まで伊勢神宮・アジア・ヨーロッパなどの建築・文化についての話をしました。伊勢です(図11)。この静岡の美術館の竣工の直前に、先生が、どうだ伊勢のようなフレッシュなものができるか、と自信と不安の表情で言われました。伊勢は私

自身も20歳ころにたまたま見て、日本の建築あるいはその後世界の建築で見た多くのものの中で、とくに感銘を受けたもののひとつです。白井先生やシュタイナーが言っているような、ここを高めるような建築のひとつだと思います。シュタイナーは、ドルナッハのゲーテアヌムの建設のさなかに仲間たちに毎日講話をして、木やその他すべての素材に手を加えるときに魂を込めることの大切さなどを説いていますが、そのことによって建築に心がこもりひとを動かすことができるということでしょう。静岡の美術館でもとくに天井にそのような気配が感じられると思っています。

木の文化と教育という今日のテーマですが、これは石の文化です。南フランスの12世紀、ロマネスクのル・トロネ修道院です（図12）。さきほど、人に優しい建築・木造というご講演がありました。ある意味で、ひとに優しい石の建築もあると、感動したものです。静岡の芹沢美術館は白井先生のこの建築へのオマージュ・思い出だったのかもしれないとも思えます。これは朝11時ごろの光りです（図13）。当時の貴族の息子たちが世を捨て、ここにこもって自分たちの手で造りあげたというシトー派の修道院。彼らは厳しい修行の結果、平均寿命が27歳くらいだったそうです。神に祈りながら石を積んでいったのだと思います。シュタイナーのこばに倣えば、その祈りが石にこもっていて、それがいつまでも静かに放射しているように感じます。ただその祈りは神に近づこうというある種のエゴイズムや傲慢さもあるのかもしれませんが。瞑想の妨げになるため聖母像以外に具象物は殆ど何もないというロマネスクの宗教建築としては異例な建築です。回廊（図14）。ヴィトロー（図15）。ガラスの色・光と石の色・テクスチュアとの調和もすばらしいと思います。写真でもある程度それが伝わると思います。

ル・コルビュジェのラ・トゥーレットの修道院（図16）。ル・トロネ修道院にコルビュジェはほとんどこばがないくらいの感動を受け、その直後に設計したものです。これもかなり禁欲的な建築と思いますが、ある種の官能的な感じも受けます（図17）。

コルビュジェのノートルダム・デュ・オー、ロンシャンの教会（図18・19）。さきほどのシュタイナーの建築論の有機的・幾何学的という文脈でいいますと、今世紀の有機的建築の代表作のひとつと言えるかもしれません。コルビュジェはシュタイナーの打ち放しコンクリートの、第2ゲーテアヌムの建築の工事中の現場をたまたま見て、やはりこばを失うほどショックを受けたそうです。その余韻からこれが設計されたのかもしれません。

その、コルビュジェが感嘆したというスイス、バーゼル近郊ドルナッハにあるシュタイナーの第2ゲーテアヌム（図20・21）。木造の第1ゲーテアヌムはナチ党員によって放火・炎上し、その後シュタイナーが1925年の死の直前に外観の粘土模型を造り、後継者たちが引き継いで1957年に内部まで完成したものです。シュタイナーは実際の設計や現場に立ち会っていないので完全には彼の作品とはいえないでしょう。その意味で、第1ゲーテアヌムの方が、残っている写

真を見るかぎり魂のこもった建築だったのではないかと思います。西側正面のステンドグラス(図22)。第1ゲーテアヌムの焼失時に運よく残ったものです。南西ドイツ・マルシュにあるモデルバウ。自然・天体とのコレスポンダンスを考えたと思われる実験的な縮小された模型建築(静かに涙のあふれてくるような建築・図23)。

ガウディのバルセロナ近郊にあるサンタ・コロマ教会(図24・25・26)。周囲の松の木々の肌と石の肌が同じようなテクチュアで視覚的にも環境に溶け込んだように建っています。ガウディが亡くなった時に書齋から聖書と構造力学の本とシュタイナーの神智学の3冊の本が出てきたそうですが、シュタイナーの思想に共感あるいは影響をうけたことがあったのだらうと考えます。ロンシャンの教会の扉には貝殻の跡が化石のように残っていますが、建築構想のイントゥイションはそれだったでしょう。ガウディも同様に自然から多くのインスピレーションを受けていたと思われます。シュタイナーは、建築は、理想的な意味での、人間のようにならないと考えていたと思います。すぐれた人々が多くの人に良い影響を与えるといったような意味で。

これはハンス・シャロウンの北ドイツ・リューネンにあるギムナジウム(図27)。シュタイナーが学校建築を設計したらこんなふうになるのではないかとも思われます。シャロウンは20世紀前半で最高の建築はシュタイナーのゲーテアヌムだといっていますが、思想的にもシュタイナーに共鳴していたようです。その他、北ドイツ・マールのギムナジウムやダルムシュタットの学校建築プロジェクトなどと現在の世界のシュタイナー学校建築を比較すると、ある意味でアントロポゾフ(シュタイナー風)の学校建築は彼の建築をも継承しているといえるでしょう。

最後に、フーゴ・ヘーリングの北ドイツのガルカウ農場です(図28)。ベルリン工科大学でシャロウンの友人でもあったヘーリングは思想的に彼に多くの影響を与えていますが、その著作「フラグメント」などを読んでみると、あるところまでシュタイナーの思想との共通点がみとめられます。この建物はよく見ると家畜の気持になって設計しているところがあって、ある意味で、やさしい建築です。1920年代の幾何学的建築派としてのコルビュジェをヘーリングは厳しく批判して、有機的建築のほうが人間の将来にとって良いのだと主張していましたが、早世しないでロンシャン教会を見ていたなら、コルビュジェにある程度共感していただらうと思います。

[Ⅳ]

いくつかの私が感銘をうけた外国の建築などを見ていただきましたが、いま考えている木造の幼稚園をふりかえってみると、やはり風土・歴史・環境なども気にかかります。ガウディの建築を写真でみていた時にはある種の違和感もありましたが、旅行してその風景の中で出会っ

てみると、その個性とは別に、カタロニアという環境風土の中での自然さ・調和に感嘆します。重々しいドイツ圏の環境のなかでのゲーテアヌムも同様です。その他のものもまた同じです。ドイツ人にはその固有の顔があり日本人にもその顔がある。人間としての共通点はどの国の人とももちろん多いと思いますが、それぞれの民族としての長所・短所もそれぞれにあり、今回の計画でも自分自身の中で結論を出さなければなりません。同時に、幼稚園の先生方ともこれから話し合いを続けなければなりません。亡くなられた白井先生が、歴史を勉強せよといわれた真意は、どこにあったかの自問もしています。今の計画を完成させながら、歴史・風土・環境にも学び、地域の特殊性・民族性などをも踏まえた上で、理想としてはシュタイナーなどの建築も乗り越えてこの時代と未来への新たな真の普遍性に至る道も探らなければなりません。

[問]

現在、木造ブームですが、あちらこちらで動きがあり、かつての昔の木造のイメージなどいろいろなものがあり、我々感動させられたりします。一方で近代の新しい構法技術が入ってきて木造であればどんなものでもよいというわけではなくデザイナーに求められているのはこの時代の木造の表現の仕方とかまた素材のもつ表情と現在の木造、シュタイナーの思想とご自身でどういう表現を考えておられるのかということをお聞かせいただきたいのですが。

[答]

現在の木造の新しいデザインの方向や構法技術とシュタイナーの思想と私自身のデザインとの関わりの中で、どういう表現をしたいのかというご質問ですが。

その前に、いま考えていることを、繰り返しになるかもしれませんが、整理させていただきたいと思います。

第1番目は、今回の幼稚園計画の課題にとって重要なことは、まず、幼児の成長・発達にとってどういう建築が望ましいのか、ということです。幼稚園の先生方と話合っていますことは、例えば、子供のよりよい成長にとっては天井の高さはどのくらいが良いのか、また吹き抜けはこどもの心身にとってあったほうが良いのか。法的な制約などいろいろあると思いますが材料はどのようなものがより望ましいのか。ドイツのシュタイナー学校などのように、例えば壁に植物顔料で塗装をすればそれで良いか、等々のことです。シュタイナーは教育や建築の方法を具体的にいろいろと言っているわけですが、例えば、ある年令の子供たちの心身の発達にとって、その心身の成長に望ましい空間の色彩があるといったことなど。シュタイナー学校の建築ではいろいろと約束事がありますが、とにかくそれを模倣すればよいということではなく、まず、できるだけひとつひとつのことの確認の作業を互いに行ってみようと考えています。シュタイナー

の教育論・建築論は説得力があり、納得してしまうことも多いのですが。

第2番目は建築に良い教育と同じような力があるとすれば、あるいはそのような建築を創ろうとするならば、それに共感して魂を込めて創る人々の協力を作り出すことが必要になります。経済的なこと・時間的なこと・多くの人との出会い等、問題はいろいろありますが、こちらのほうが重要であるとも思います。形だけシュタイナー風で力のないものができてもしかたがないことですから。

このことで思い出すのは、さきほどの静岡の美術館での主として天井のことです。小さな家具を手掛けていた人を説得し、檜の無垢材で大きな天井をやっていただいたわけですが、心をこめてやって頂いた。現場監督の人のお話によると、竣工直前に近所のひとがたまたま中を見に来て、天井をみて涙を流したそうです。白井先生は、精神の改良を導くような空間の創造、といったことをかつて書かれています。やはり建築の構想・設計・施工にとってもたいせつなことは魂をこめるといふことだろうと思います。

ご質問にもどりますと、木造の新しいデザイン・構法技術等については、今考えていることの結論がある程度煮詰った時に、ある意味で必然的に導かれるだろうとも思っています。どういう表現をしたいかということについては、表現・デザインは目的ではなく、このようなことながらを実現してゆく努力の結果に現われてくるだろうとも考えています。人間の創造するデザインの力も信じなければ設計はできませんが、素材・自然・環境の方が人間にとってより大きな力をもつだろうとも思います。絵は一本の木の力を超えられるかどうかということ。しかし、人間の中の自然（精神）は建築的にも、木や他の素材にも込めることも可能であると考えます。

以前に設計にある種の限界を感じた時に（白井先生の言われたように、建築でひとは変わるか？）、ドイツでシュタイナー教育を勉強して子供の教師になろうとも考えたのですが、ことばの力も建築の力も他の力も、手段としては同じであるといまは思います。教育も建築も同じ様に手段でありそれ自体が目的でないとなれば、結局は自分自身がいちばんの問題・障害であるようにも思います。こどもの教育だけでなく、同時におとなの（自分自身）の自己再教育の方が先に必要ということでもあるのでしょうか。

[補]

[1] 近年、戦後のRC造校舎や公共施設が老朽化しつつある中、木造建築、特に木造の教育施設、教育のための建築空間としての木造校舎が見直されつつある。このシンポジウムはこのような状況の下に企画され、建築家・建築構造家などがそれぞれの実践的立場から講演を行なったが、私自身も子供の教育空間としての木造建築について、現在の状況の中でいわゆるシュタ

イナー建築をはじめ、この分野で国内外で先駆的な仕事をされている方々に学びつつ考えているところである。

自然の材料としての木（有限な資源）とその文化・伝統、また現在の技術・流通・経済的・社会的構造等々、見直すべき問題は多く存在するが、今回の計画では、R.シュタイナーの思想・教育論にもとづく教育を实践・模索されている幼稚園からの依頼ということもあり、自然材料としての木の素材と形態との関係（自然の素材・また空間・造形・形態・ディテールが子供の成長にとってどう影響をあたえるか）をおもな課題として考えている。

講演では今回の計画の考え方のひとつの背景・基礎としてのR.シュタイナーの教育論・建築論などについて少し述べたが、時間の制約などのため多少の補足を行なう。白井建築研究所での静岡市立美術館などにおいても背景にある中心的テーマは、建築は「精神」にどこまで影響することができるかということにあったと思われるが、幼児の教育施設ではこのことは特に重要な課題である。

[2] 建築の設計者は必ずしも教育学の専門家ではないが、このような課題を考え実践する場合、ある程度教育について考える必要・義務もあると思われるので、いわゆるシュタイナー教育を考える前提として、留学中に多少とも見聞したドイツの現行の教育制度やシュタイナー教育をわが国の教育制度とも比較して簡単に考えてみたい。

旧西ドイツでは1960年代まで職人・技術者・大学の各コースが10才の時にはっきりと分けられ、大学入学者は9%であった（現在は15%以上）。職人・技術者のコースも国家試験によってマイスターになると、大学卒業者と同じ収入・社会的な地位が保証されていたため、大学に進学しなくてもそれぞれのコースで誇りと目標を持って生きてゆくことができた。大学に行かないと出世できないといった風潮はほとんどなかったため、各々がそれぞれの世界で充実し、比較的社會がうまく動いていたと思われる。現在では、皆が大学に行けないのは不公平ということで制度改革が行なわれ、どのコースからも大学に進めるようになっている。これによって大学の大衆化が比較的進み、これと並行して日本の現状と同じような、序列化・差別意識がしだいに出てきた。ドイツでも戦後、種々の面で米国の影響を受けて来ているが、日本と同じような道をたどってきているように考えられる。

精神的な豊かな建築・住宅・学校建築等を創造するためには、建築家の創造性だけでなく職人・技術者の高い技術・人間性・誇り・意欲・知性が不可欠であると考え、わが国でもこの序列化・差別意識がこの誇りなどをなくし、同時に建築・都市環境・景観の精神的・造形的豊かさなども失われつつある状況にみえる。

[3] 日本の教育（受験）制度は、ドイツなどと比較し、また世界的に見ても特殊である。ほとんど一回のテストのみで大学の入学を決めることは不合理な面も多い。ドイツの場合、各々

高校独自の基準で卒業試験（アビトゥア）を行ない、卒業した者は原則として無試験でどの大学でも入学できる。大学はすべて国立大学であり大学間の格差は原則としてはない（卒業は難しい）。各々の国の制度には長所短所があり、日本の現状の制度は、ある程度だれもが階層貧富の差なく競争できるという「平等主義の原理」が長所であるとも考えられる。しかし、18才の時の、創造性を殆ど問題にしない記憶中心の試験で社会的に序列化される。これはある意味で脳の創造性・可能性を抑圧・破壊しているともいえるだろう。高校までの学力は世界的に高いレベルにあるとされるが、その後の大学での教育・研究（その社会への貢献度等）の質は、ある米国の研究者によれば、世界的にみて低いレベルにあるとされている（40位以下）。

現在の日本の教育制度は戦後アメリカから輸入されたものとはいえ、6・3・3制などの形式上の制度自体の問題もあると考えられるが、それと同時に、社会の構成員・社会そのものの成熟度の問題もあると考えられる。これまでのいわゆる受験戦争の弊害や、幼児期から植え付けられる競争主義による優越・劣等感、その後の個々人の全体としての人間的・能力的成長に歯止めをかけているだろう。結局のところ、生き方・考え方・人生観・親の子供に期待するものは何かを根本的に考え、変革しない限り、本質的に個人にとっても社会にとっても不合理な教育の制度と内容は改良されないだろう。

[4] ここで、ドイツの一般の教育や日本の教育などと比較してシュタイナーの思索した教育とその実践について簡単に考えてみる。

シュタイナー学校（自由ヴァルドルフ学校）にはドイツなどの他の一般の公立学校などと比較し、独自の教育の考え方と方法がある。ヴァルドルフ学校は幼・小・中・高一貫教育の私立学校であるが、ひとことで言うならば、子供たちがのびのびと、真・善・美を喜びをもって体得しながら、世界を発見してゆくように導く教育を目指す学校、ということにもなるだろう。また、教育の方法自体・授業などによって、子供が利己的な人間に育たないように教育することも重要な目標となる。（競争原理を排除し、軽度の心身障害児などとも共に授業などを通して互いに助け合うことを学ぶことなど。このことは親の理解・成熟も必要となるだろう。）

試験や点数による序列化がなく（成績表がなく）、教科書はなく生徒自身がそれを芸術的にも美しく創り出してゆくように教育される。

シュタイナーの人間観・人間洞察によって、先に述べたように、次のように教育がなされる。

第1期（0－7才）⇒身体感覚を健全に発達させ周囲によき模倣の対象をおく

（おとな―教師・親―が子供に模倣されてよい生活をする）

第2期（7－14才）⇒世界を芸術的、美的に喜びとともに感じとらせる

第3期（14－21才）⇒世界と人間に対するあらゆる関心をよびおこす

（概念・知識・本ものを創造的・発見的喜びと共に与える）

子供の心身の発達にとってこのような教育方法が、その成長にとって自然であるということであるが、第2期まではいわば、芸術的に楽しく遊んでいるだけのように見えるが、理想的にゆけば、第3期には真に学問的に自発的に、押し付けや暗記でなく、あらゆるものを創造的喜びと共に吸収するということになる。ドイツでも大学にはいるための高校の卒業試験（アビトゥア）があるので、大学進学者は困るとも思われるが、学問に対する積極的意欲が育っているため、実際にはそのための一般的な学力も短期間に身につけてしまうことになる。教育の成果、特に人間的な成長や質・成熟度・人間性などは客観的な証明・数値化の困難なことであるが（人間を総体としてとらえねばならない学問はすべてそうであろう。広い意味での建築計画学なども）、ドイツ・スイス等での経験では、多くのこの学校を訪れ教師・生徒・卒業者などに身近にもたくさん出会ったが、例えば私の専門領域の大学院の都市計画学の教授などのように人間的にも豊かで思いやりがあり能力も優れている、感銘を受ける人々が多いように感じられた。シュタイナーの教育観は、ひとつには、学問・芸術・宗教が生命を持ちつつ統合されるようにすることであるが、子供を導いてゆく教育という使命自体を最高の芸術的活動とする。この学校は、ドイツなどでも実験的な特殊な例でもあるが、この教育と比較すると、日本の受験的教育方法は子供の自然な発達をさまたげる、不自然な点も多いと思われる。しかし、この学校の理念・理想による教育方法は教師や親が人間的にも能力的にも優れていなければ実現し難いことも事実であり、そのために教師・親の不断の自己改革が求められるということでもある。

[5] 幼稚園をどう設計するか的前提として、また、日本の教育・社会の現状をどうすればより良くなるかということを考えるためのひとつの参考としても、シュタイナー教育・建築はある示唆を与えてくれているとも考える。教育・受験制度などを見直すことは必要であることは当然としても、形式以上に、それより先に、社会（おとな）が子供たちにどう育ててほしいのか、何を期待するのか、理想・目標を明確にすることが重要である。戦後の経済一元至上主義は一見破綻したかのようにも見えるが、パンのための教育（幸福感の問題）・安定・地位を求めることのみを子供の将来の幸福・目標と親が考えて来たとすれば多くの子供はそれ以上の目標や理想は持ちにくい。[受験教育の弊害・人格陶冶の教育・道徳不在の教育]を唱えても社会（個人）の人生観・生活観が安直で子供の手本になっていなければ、事態は変わらない。現行の教育・試験制度で人間の価値・人間性を序列化できないことは当然であるが、人間性・徳・思い遣り・行動力・判断力・実行力・指導力等はどうのようにして教育可能か。シュタイナー学校で教師や親に求められているように、だめに教育されてしまった（と気が付いていない）ほとんどすべてのおとな各々の自己再教育がまず必要ということかもしれない。シュタイナーの教育論・実践は特別なこと・特殊なことがあるのではなく、たんにこれまで、人間としてのあたりまえのこと（または理想）と考えられてきたことをこどもに身に付けさせるにはどうすれ

ばよいかの試みであるに過ぎないともいえるが、ほとんど実現されていないあたりまえのことをいかに実現するかが重要であるともいえるだろう。わが国ではこの50年の間、[個人主義=利己主義]の教育を徹底し、人間として最も基本の[徳]を排除してきたマイナスの教育成果が現在多く現われてきているのもまた確かなことでもあろう。

[6] 子供をとりまく環境はこれからますます精神的・物理的に困難な状況になると考えられる。これまでの世界的規模での問題、[自然環境破壊(科学技術文明)・東西問題(核・経済格差・人権問題)・南北問題(経済・技術格差)・精神の荒廃(宗教・民族・イデオロギーの対立)]等々は冷戦終結などといってもすべて本質的に解決されているわけでない。また、欧米の一部の研究者(物理学者・軍事関係の工学者等)やジャーナリズム等で問題とされつつある、データ通信の変革にともなう電磁波による地球の破壊(インターネット・デジタル放送・携帯電話等——便利さや経済主義——の急速な普及による多量の通信衛星の打ち上げ計画——マイクロソフト社等また日本の国家プロジェクト等も含め——等による地球の地磁気の変化——自転への悪影響——やそれにとともなう気象異常)の危険性・超高压送電線下でのガン発生率の増大等、わが国では、報道による二酸化炭素・環境ホルモン等々の問題にかくされほとんど世論にされていない、欧米で問題となりつつある、地球の存続にとって核以上の危険性を指摘されている電磁兵器等。

特に、資源の少ない食料自給率なども低い島国日本などにとっては、これらは日常的な最低限の生活・生存にきわめて密接なことがらであり、世界のなかで綱渡りをしているようなものでもあるだろう。これらの地球規模かつ日常的な問題を解決できるような、知識と同時に知恵・徳・責任感・行動力などを育ててゆくことは、これからの子供の理想・義務というより、生存するための最低の条件であろうが、だれがどのように導くのか。

いろいろな問題の根底にあるのはひとつには利己主義・排他主義・差別意識などでもあろうが、利他主義・自己犠牲・親切・思いやり、正しいもの・真のもの・美しいものに感動し、それを愛する能力などはどのように身につけることができるか。おとなにできることのひとつは、まず、教育での序列化による子供のマイナスの競争意識・優越・劣等意識から子供のころを自由にしてやること、また、これから世界で生きるには、ほんらいの勉強を喜びと真の義務感と自発的な創造性で一生続けてゆかなくてはならないことを教えることだろう。幼児教育はその最初の基礎として多くの重要さをもつと考えられる。

ドイツでもある程度そうであるが、フランス・イギリスなどではかつての貴族的階層と大衆との分離・対立の問題が教育制度的にも現実的にも社会問題として存在し、米国では現在の日本と同様に競争が比較的オープンではあるが、一生の間続く熾烈な競争社会の精神的ストレスの問題などもある。日本では例えば、これまで社会学者や精神医学者等が指摘してきたような

村社会的精神構造の問題がある。ほんとうの個人主義というものがあるとすれば、それが育たないような社会風土もまた存在する。目立つことを避ける和と調和の精神といったものは時には美德でもあろうが、本当の責任感や使命感をもった指導者が育ちにくいということでもある。また、真の民主主義というものがあるとすれば、社会のほとんどすべての構成員の高い人間性や知性、また、優れた指導者がなければ成立しないだろうが、まずは、知恵・徳・責任感・行動力等のある真の指導者とそれを理解・尊敬・協力することのできる人々を育てることが必要であるということでもあるだろう。

例えば、真・善・美を愛するというような人間としてきわめて基本的な能力、家族・他人・地域・日本・世界……をどこまで広く・深く自分の問題としてとらえられるかという能力などを育てることは、ひろい意味でのよい教育なしで実現でき難いことだろう。

[7] 建築の設計・創造について再び考えてみると、シュタイナーの教育的建築論に従えば、例えば、真・善・美（とは何かなどというペダンティックな哲学的論議のみに陥ることなく）を愛するような子供を育てるためには、建築自体もそのように創られなければならないということでもある。この「理想主義」は特に日本の種々の現状を考えれば実現困難であるかもしれないが、この講演で取り上げたいいくつかの建築は、このようなことをある程度実現している数少ない例であるとも考える。それらの建築の感動の質はそれぞれ異なるが、共通していることは、まず、設計に際して自然との共感・共鳴・感動、自然の法則・秘密を直感的に感じ取り、そこから何らかのインスピレーションを受け取った結果に建築が必然的・自然に導き出されているのであろうということである。このことも、歴史的に考えればきわめてあたりまえのことでもあろうが、自然の美や調和に共鳴し、具体的な素材（木や石など）をそのように自然に取り扱う謙虚・謙譲の精神といったものがこれらのいくつかの建築に感じられる。建築の質というのは、それに関わるすべての人間の質に関わり、そこに帰結すると考えられるのであれば、このこと自体、やはり人間の総体としての基本的教育の力と密接に関係しているであろう。自然に共鳴・感動することのできる謙虚・素直な人間性が純粋な創造の原動力であるとするれば、それをどのように自然に育てることができるかという問題でもあるだろう。

(付記) 本稿は広島女学院大学学術助成による成果の一部である。考え・設計を進めるにあたってご助言・ご示唆・ご指導を頂いてきた恩師の先生方、建築家故白井晟一先生・早稲田大学名誉教授武基雄先生・故吉阪隆正先生・シュトゥットガルト大学名誉教授ユルゲン・イエーディケ先生・東京大学名誉教授原広司先生・建築家磯崎新先生、また、特にシュタイナーについては、東京大学名誉教授新田義之先生・東海大学教授上松佑二先生、ヴァルドルフ学校・幼稚園の多くの先生方・卒業生・生徒・園児などに深く感謝いたします。

[文 献]

- 1) Rudolf Steiner: Wege zu einem neuen Baustil, Verlag Freies Geistesleben, Stuttgart, 1957.
- 2) Rudolf Steiner: Und der Bau wird Mensch, Rudolf Steiner-Nachlaßverwaltung, Dornach, 1982.
- 3) Rudolf Steiner: Der Dornacher Bau, Rudolf Steiner Verlag, Dornach, 1985.
- 4) Hagen Biesantz, Arne Klingborg: Das Goetheanum, Philosophisch-Anthroposophischer Verlag, Dornach, 1978.
- 5) Rex Raab, Arne Klingborg: Sprechender Beton, Philosophisch-Anthroposophischer Verlag, Dornach, 1972.
- 6) Erich Zimmer: Rudolf Steiner als Architekt, Verlag Freies Geistesleben, Stuttgart, 1971.
- 7) Hans Ruedi, Priska Clerc: Das Goetheanum und seine Umgebung, Verlag am Goetheanum, 1985.
- 8) Rudolf Steiner: Der Baugedanke des Goetheanum, Verlag am Goetheanum, 1986.
- 9) 上松佑二: ルドルフ・シュタイナー, PARCO 出版, 1980.
- 10) Rudolf Steiner: Die Erziehung des Kindes vom Gesichtspunkte der Geisteswissenschaft, Rudolf Steiner-Nachlaßverwaltung, Dornach, 1969.
- 11) Rudolf Steiner: Allgemeine Menschenkunde als Grundlage der Pädagogik, Rudolf Steiner-Nachlaßverwaltung, Dornach, 1969.
- 12) フランス・カルルグレン: 自由への教育, 高橋 巖・高橋弘子訳 ルドルフ・シュタイナー研究所, 1992.
- 13) Rex Raab, Arne Klingborg: Die Wardorfschule Baut. Verlag Freies Geistesleben, 1982.
- 14) Rudolf Steiner: Theosophie-Einführung in übersinnliche Welterkenntnisse und Menschenbestimmung, Rudolf Steiner-Nachlaßverwaltung, Dornach, 1955.
- 15) Rudolf Steiner: Wie erlangt man Erkenntnisse der höheren Welten? Rudolf Steiner-Nachlassverwaltung, Dornach, 1955.
- 16) Rudolf Steiner: Die Geheimwissenschaft im Umriß, Rudolf Steiner-Nachlaßverwaltung, Dornach, 1962.
- 17) Heinlich Lauterbach, Jürgen Joedicke: Hugo Häring Schriften, Entwürfe, Bauten, Karl Krämer Verlag, Stuttgart, 1965.
- 18) Rudolf Steiner: Kunstgeschichte als Abbild innerer Impuls, Rudolf Steiner-Nachlaßverwaltung, Dornach, 1981.
- 19) Erziehungskunst monatschrift zur Pädagogik Rudolf Steiners 1996 Juli/August Thema: Schulbau, Verlag Freies Geistesleben, Stuttgart, 1996.
- 20) Rudolf Steiner: Tafelzeichnungen Entwürfe Architektur, edition tertium, 1994.
- 21) Walther Roggenkamp: Das Goetheanum als Gesamtkunstwerk, Verlag am Goetheanum, Dornach, 1986.
- 22) Jürgen Joedicke: Architektur der Zukunft der Architektur, Karl Krämer Verlag Stuttgart 1982.
- 23) Hugo Häring: Fragmente, gebr. mann verlag berlin, 1968.
- 24) R. シュタイナー: 教育の根底を支える精神的・心意的な諸力—オックスフォード講演—, 新田義之訳, 人智学出版社.
- 25) 広瀬俊雄: ルドルフ・シュタイナーの人間観と教育法, ミネルヴァ書房, 1988.
- 26) 本村佳久: 有機的建築の研究—R. シュタイナーの建築思想について—, 広島女学院大学論集第47集, 1997.
- 27) 子安美智子: ミュンヘンの小学生, 中央公論社, 1975.
- 28) 子安美智子: ミュンヘンの中学生, 朝日新聞社, 1980.
- 29) クリストフ・リンデンベルク: 自由ヴァルドルフ学校, 新田義之・新田貴代訳, 明治図書出版.
- 30) 高橋 巖: シュタイナー教育の四つの気質, イザラ書房.

- 31) 高橋 巖：シュタイナー教育入門，角川書店。
- 32) M. コーネマン：シュタイナー学校の芸術教育，鈴木一博訳，晩成書房。
- 33) ルネ・ケリード：シュタイナー教育の創造性，佐々木正人訳，小学館。
- 34) フライヤ・ヤフケ：手づくりおもちゃ（シュタイナー幼稚園教材集），高橋弘子訳，地湧社。
- 35) フライヤ・ヤフケ：幼児のための人形劇，高橋弘子訳，フレーベル館。
- 36) スーゼ・ケーニヒ：幼児のためのメルヘン，高橋弘子訳，冬芽社。
- 37) ニーダー・ホイザー：シュタイナー学校のフォルメン線描，高橋巖訳，イザラ書房。
- 38) E. グルネリウス：七才までの人間教育，高橋 巖・高橋弘子訳，フレーベル館。
- 39) R. シュタイナー：ゲーテの世界観の認識論要綱，浅田豊訳，筑摩書房。

その他

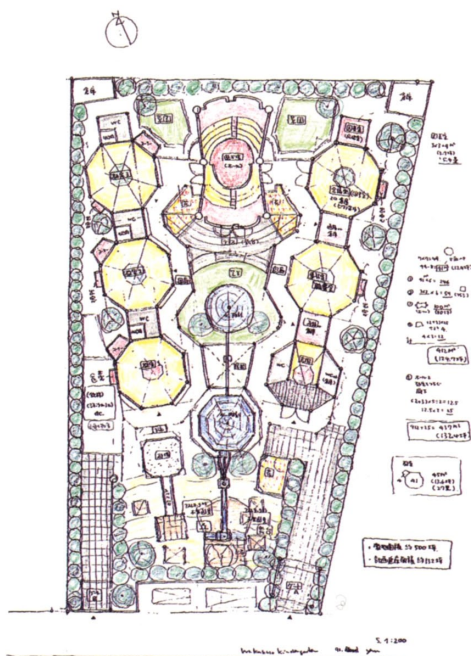


図1 幼稚園計画・エスキース（本村佳久設計）

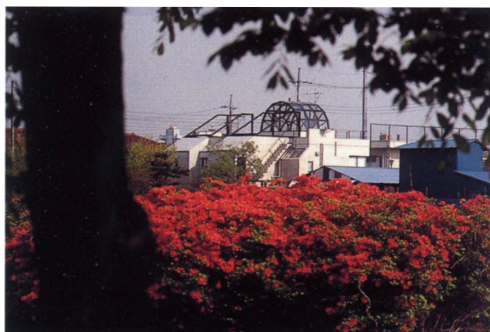


図2 RC造住宅（本村佳久設計）

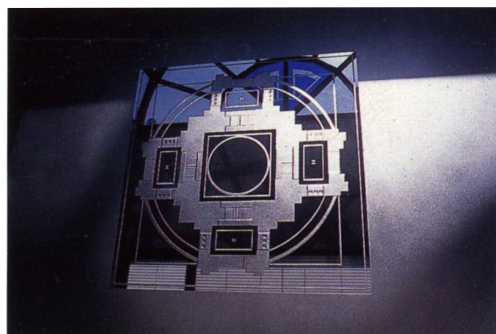


図4 RC造住宅・寝室エッチングガラス（本村佳久設計）



図3 RC造住宅・家族室（本村佳久設計）

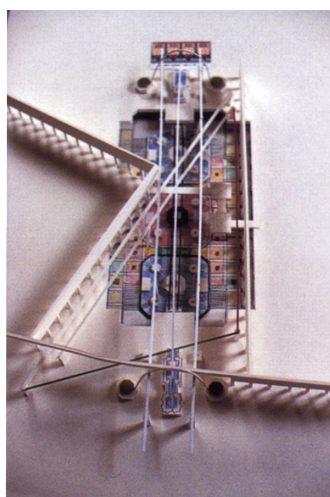


図5 超高層ビル広場基本構想設計（本村佳久設計）

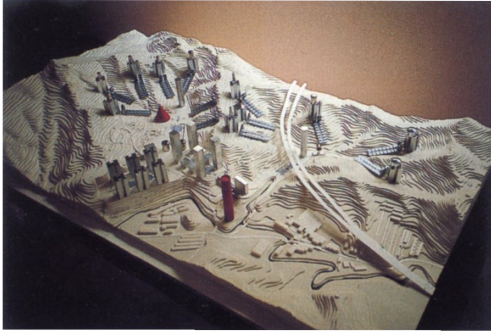


図6 台北市新都市計画 (本村佳久設計)



図7 集合住宅・商業施設 (本村佳久設計)

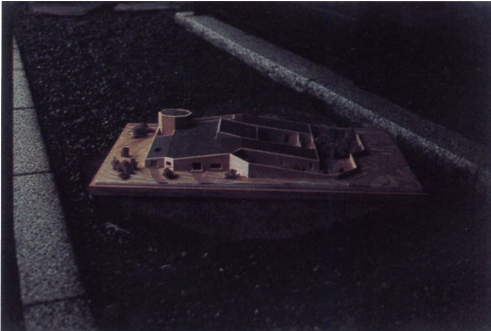


図8 静岡市立美術館・模型
(白井晟一研究所・本村佳久設計担当)



図9 静岡市立美術館
(白井晟一研究所・本村佳久設計担当)



図10 静岡市立美術館
(白井晟一研究所・本村佳久設計担当)



図11 伊勢神宮内宮正殿 (渡辺義雄氏撮影)



図12 ル・トロネ修道院

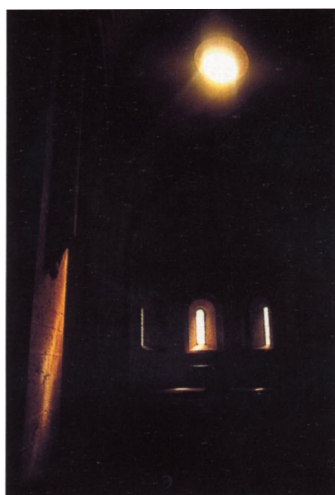


図13 ル・トロネ修道院・聖堂

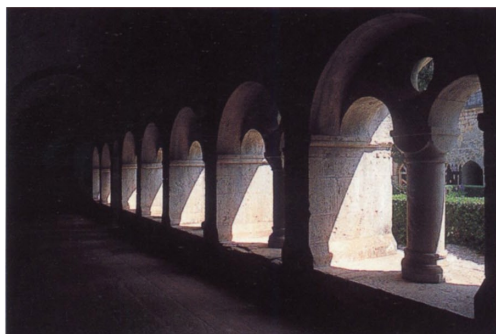


図14 ル・トロネ修道院・回廊

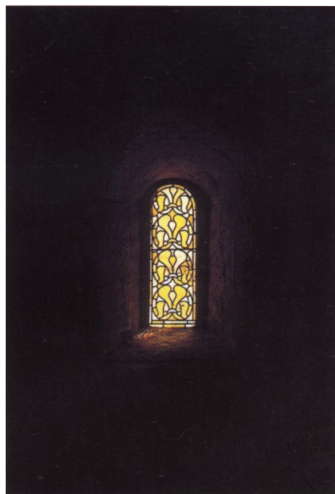


図15 ル・トロネ修道院・ステンドグラス

図16 ラ・トゥーレット修道院
(ル・コルビュジェ設計)



図17 ラ・トゥーレット修道院・聖堂
(ル・コルビュジェ設計)



図18 ロンシャンの教会 (ル・コルビュジェ設計)

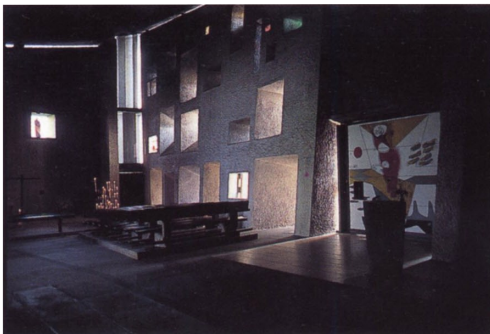


図19 ロンシャンの教会 (ル・コルビュジェ設計)



図20 第2ゲートアスム (R. シュタイナー設計)

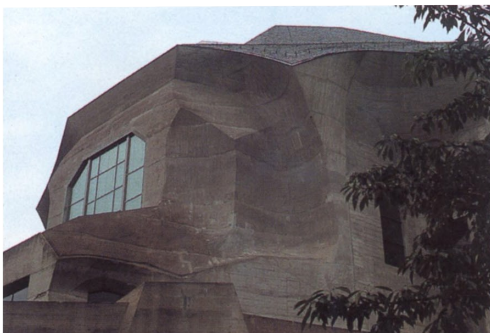


図21 第2ゲートアスム (R. シュタイナー設計)

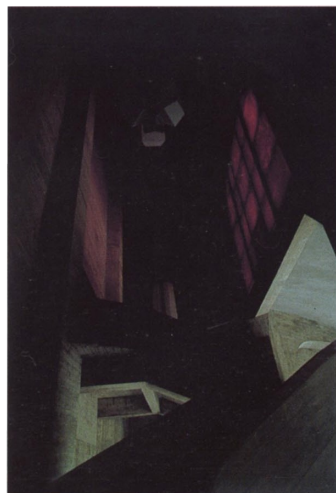


図22 第2ゲートアスム・ステンドグラス
(R. シュタイナー設計)



図23 マルシュのモデルバウ (R. シュタイナー設計)



図24 サンタ・コロマ教会 (A. ガウディ設計)



図25 サンタ・コロマ教会 (A. ガウディ設計)

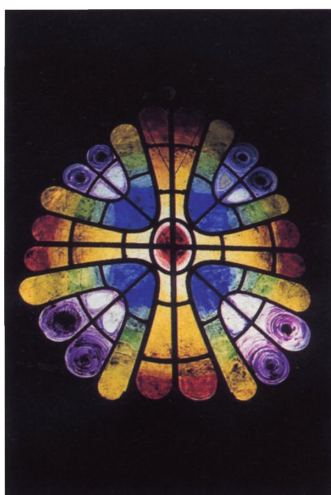


図26 サンタ・コロマ教会・ステンドグラス (A. ガウディ設計)



図27 リューネンのギムナジウム
(H. シャロウン設計)



図28 ガルカウの農場 (H. ヘーリング設計)

(写真撮影：本村佳久——図10・11を除く——)